

資料紹介 織部向付

鳥村 桂子



図1 織部向付(名古屋市博物館蔵)

(胆礬)が施される。志野は、それまでロクロを用いた円形であったやきものの形を歪ませ、白色の釉薬をかけ、筆を用いた絵付けが施されるようになった。この黄瀬戸における線刻と胆礬、そして志野における円形から歪みへの変化と筆による文様表現を経て、江戸時代初頭に織部が誕生した。織部と聞くと、まず緑色の釉薬を用いたものが想像されるが、光沢のある黒色を呈する織部黒、志野の系譜を引く白色主体の志野織部、異なる胎土を継ぎ合わせて銅緑釉の緑と赤く発色した胎土との対比が鮮やかな鳴海織部など、色だけを見ても多様なやきものが生み出された。

本資料は、五客で一揃いの向付である【図1】。向付は、刺身や和え物などが盛られる食器の一つで、懐石では汁椀・飯椀とともに最初に登場し、その後は料理を取り分けるうつわとして使用される。向付という名称は、膳の手前にある椀の向こう側にうつわが置かれたことから由来する。

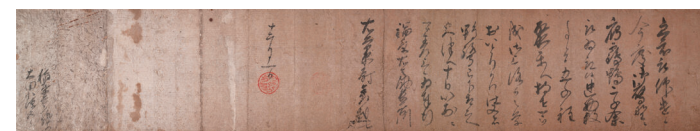
器形は、上部の突から扇状に広がり、傘の形のような。上下二か所に銅緑釉をかけ、見込みの釉がかからない部分には、鉄絵による文様が描かれている。このように、器の一部に銅緑釉をかけ、残りの部分に鉄絵具で絵を描いたものを青織部と呼ぶ。

次に本資料の制作技法について見ていきたい。内側には表面に布目の跡が見られる。これは型を使って形を作ったあとに型と粘土を剥がしやすくするため、間に布を挟んでいたために残った跡である。型づくりの手法には、ロクロで皿形や碗形に成形した後型にかぶせる方

(次ページへ)

豊臣秀吉の「大鷹野」と家督相続

一天正十九年十二月一日付豊臣秀吉朱印状をもとに



リニューアルレポート 5

津田 卓子

今秋、名古屋市博物館は、プレオープンを迎えます。令和八年(二〇二六)二月、工事現場では館全体を覆っていた足場が取り払われ、新しい外観が見えてきました。縦に走る樋が濃茶色に変わりましたが、まるでリニューアル前からこのような姿だったかのような馴染みようです。周囲の景観に溶け込みつつ、全体的に締まった印象となりました。

さて、九月五日(土)から十一月一日(日)まで開催されるプレオープン展では、二本の特別展を同時開催します。ひとつは特別展「リトアニアアーバルトの森に響く歌」(次ページ参照)、そしてもうひとつは特別展「名古屋には秀吉がおるでよ!」秀吉と尾張の歴史」(羽柴学芸員による本号記事参照)。海外の文化と地域の歴史を紹介する姿勢は、これからも名古屋市博物館における活動の柱といえ、プレオープンにふさわしいラインナップとなりました。それぞれの展覧会の詳細は次号にて紹介します。(次ページへ)



写真1 足場解体中の南側外壁 左上はリニューアル前の外壁

名古屋 博物館 だより 2026.4.1 241

リニューアル レポート 5



資料紹介 織部向付



名古屋市博物館だより 241号
令和8年(2026)4月1日
年2回(10月、4月)発行

編集・発行/名古屋市博物館
〒467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
<https://www.museum.city.nagoya.jp>

古紙を含む再生紙使用

リトアニアとの絆

令和七年(二〇二五)八月二十一日、名古屋市博物館とリトアニア国立博物館は友好館協定を締結しました。調印式にはリトアニアからシャルナス・ビルティス文化大臣、ルータ・カチュクテ国立博物館長、名古屋市からは広沢一郎市長、近藤善紀館長が出席しました。

同国カウナス市でユダヤ難民にビザを発給したことで知られる杉原千畝が旧制第五中学校(現瑞穂高等学校・瑞穂区)出身であった縁により、当館では、令和五年十一月四日に「リトアニアのゆうへい NAGOYA」を開催、また同五年から七年にかけて、学芸員らが渡欧し、リトアニア国立博物館で調査を行うなど交流を深めてきました。このたびの友好館協定は両館の絆を促進するため、展覧会や学術研究での提携を確認するものです。特別展「リトアニアーバルトの森に響く歌」はその手始めとなる展覧会として位置づけられます。



写真2 左から
ビルティス文化大臣 カチュクテ館長 近藤館長 広沢市長

手話撮影での気づき
令和八年二月、展示室で使用する手話映像のデモ撮影に立ち会いました。はじめは珍しい機材に気をとられていたのですが、多くの学びを得る機会となりました。撮影現場では、字幕と手話が同じ時間内で収まる方法や、正確な意味を伝えるためにどの手話表現が適切かについて、撮影業者、手話者と相談しながら作業を進めていきました。たとえば「記録」という語ひとつとっても、書籍を指すのか絵画を指すのかで手話表現が違ふこと、資料名などは指文字での表現「北斎大画即書細図」は「ほ・く・さ・い・た・い・が・そ・く・し・よ・さ・い・ず」になるため情報過多になりがちなことなど、そもそも学芸員が原稿を執筆する段階から意識すべき点が多くあることに気づかされました。また話し合うなかで情報が整理され、全ての視聴者にとってより伝わりやすい内容になりました。こうしたことは、実際に現場に立ち会わなければ実感として腑に落ちていなかったらと思うます。今回のデモ映像は聴覚障害者のヒアリングを経て、本格的な撮影に入ります。



写真3 手話撮影風景



写真4 屋上工事風景

屋上に池出現
令和七年十二月のある日、屋上に上ると、そこにはあるはずのない池が出現していました。

一瞬ぎよつとしますが、雨水が溜まったわけではありません。防水対策テストを実施中だったのです。大雨に見舞われても、これで一安心です。このように防水・止水対策のほか、耐震補強、空調設備の更新、展示設備の更新など、取藏品をより長く、より安全に守るための工事が続きます。

冒頭でお伝えしたとおり、リニューアル改修工事はいったん七月で終了し、九月にはプレオープンを迎えます。ただし、この段階で公開できるのは一階と庭園のみ。プレオープン終了後の十一月二日(月)からは再び休館し、二階や三階を中心とした内装工事、エレベーターやエスカレーター工事を続行します。とどのつまり、全館オープンまで、もう少しお待ちすることになってしまいました。

そのためには、プレオープン展はお見逃しなく。

法と、タタラ（薄い板状にした粘土）を型に押し当てる方法がある。ロクロと型で成形した製品は底や角に丸みが見られるのに対して、タタラと型で成形した製品では底の立ち上がり角がぼつっているのが特徴である。本資料は底の立ち上がり直角になっており、タタラと型で成形したものであることが分かる。さらに、内側の表面には放射状に広がる凹凸があり、器形の傘の形と相まって、傘の骨のように筋があらわされている【図2】。これは成型時に型に凹線を彫っておくこと



図2 拡大

で、タタラを押し当てたときに凸として写し取られる【図3】。ロクロと型の成形がより古い技法とされ、のちにタタラを用いた型成形へと変化していく。タタラと型での成形を取り入れたことで、本資料のような複雑な形と表現をもつ器をつくることが可能となった。

形の多様化により、内面と側面の絵付けにもバリエーションが生まれた。上下に施された緑の釉薬の間に、蕨状の植物文や網目文が描かれている。網目文は蜘蛛の巣のようにも見えるが、小さな実や花を点で表した蕨状の植物文から考えると瓜のような植物の葉をモチーフとしているとも見られる。立ち上がり内側には横に一本の線、外側には萐蒲が描かれている。五客それぞれで銅緑釉のかかる部分が微妙に異なり、特に外側の萐蒲文の描かれ方と区分けはそれぞれの向付で変化を楽しめるよ

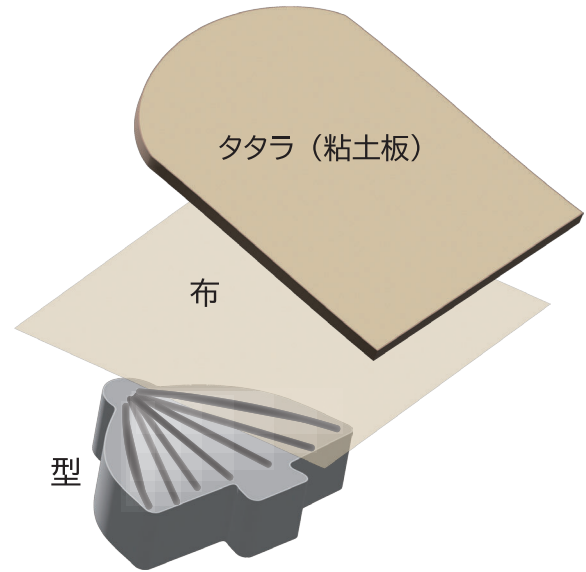


図3 制作方法

うに描き分けられている。絵付けの順番としては、素地に鉄絵をつけ、そのあとに透明釉をかけ、最後に銅緑釉をかけていると考えられる。初めから鉄絵を施す場所と、銅緑釉をかける部分を計算しながらつくられ、かつ向付として料理を盛った際の見栄えまで考慮されている。

織部は岐阜県土岐市の北部の泉町久尻に位置する元屋敷窯に始まる。元屋敷窯では慶長十二年（一六〇七）頃から連房式登窯が導入され、盛んに織部が制作されていく。つまり、江戸時代に入ってからのがやきものということになるが、織部の作行きは桃山期の気風に満ちている。美濃で焼かれた多様なやきものは消費地に運ばれ、京都では三条の「せと物や町」などで売られたようで、三条の遺跡からは膨大な量の美濃のやきものが出土しており、京都三条通中之町（中京区三条通柳馬場東入ル中之町）から本資料に酷似する傘形の向付も出土している。多種多様なやきものが生み出される中でこの向付を選び、用いた当時の人の心情を想像してみたい。

なお、本資料は名古屋市秀吉清正記念館で令和八年度五月十六日から七月五日に開催される「特集展示 桃山陶の美をつなぐ」にて展示予定である。ぜひ実物をご覧いただきたい。

- 〈参考文献〉
- 赤沼多住ほか編『茶陶の美 第二巻 桃山の茶陶』二〇〇五年 淡交社
- 土岐市美術館蔵歴史館『市制五〇周年記念 第十七回 土岐市織部の日』特別展 織部様式の成立と展開』二〇〇五年
- 特別展「愛華のとき 桃山」実行委員会／名古屋博物館・中日新聞社編『名古屋開府四〇〇年記念特別展愛華のとき 桃山』二〇〇年
- 京都市文化市民局文化芸術部市推進室文化財保護課「京都市文化財ブックス第三〇集 三宅せと物や町・桃山茶陶」二〇一六年

豊臣秀吉の「大鷹野」と家督相続

―天正十九（一五九一）年十二月一日付豊臣秀吉朱印状をもとに―

羽柴 亜弥

天正十九年（一五九一）の十一月から十二月にかけて、秀吉は三河の吉良（現西尾市）で大々的な鷹狩りを催した。鷹狩りは鷹などの猛禽類を使って、鶴や雁などの鳥を獲る狩猟の方法である。この時代には、鷹狩りは軍事訓練としての性格を強め、武将間の協力関係の確認や戦の作戦会議などの場として開催されるようになった。秀吉は、天下統一して間もない、天正十九年閏一月に吉良で鷹狩りを挙行した。今回紹介する鷹狩りは、同じ年に改めて行われたものだが、他の鷹狩りに比べ盛大に執り行われ、明らかに特別な行事であった。

<p>〈翻刻〉</p> <p>急度被仰遣候、 今度御鷹野ニ 雁・鶴・鴨二千余 被為取候、〔御鷹野〕 迎物数 事候間、〔御鷹野〕 五千程 聚楽へ持せ、可被 成御上洛候之条、 おいとりかり仕、又者 鴨・鷺已下取之、 大津へ十日以前ニ 可差上候、為奉行 福原右馬助・長谷川 右兵衛尉差越候、 十二月一日（朱印） 稲葉兵庫頭とのへ 太田小源五とのへ</p>
--

〈意識〉
急いで命令をします。
今度、鷹狩りで雁・鶴・鴨を二千余り取りました。〔御鷹野〕何としてもさらに多くの数を用意することが重要で、〔御鷹野〕五千程を聚楽に持たせて、上洛するのがふさわしいでしょう。

追取狩り（※狩りの方法の一種）やその他の方法で、鴨や鷺などを取り、大津へ十日以前にもってきなきい。
奉行として福原右馬助（長堯）・長谷川右兵衛尉（守知）をそちらに遣わします。
十二月一日（朱印）
稲葉兵庫頭（重通）とのへ
太田小源五（一吉）とのへ



写真 天正十九年十二月一日付豊臣秀吉朱印状(名古屋博物館蔵)

秀吉がこだわった、京都への帰り方

今回紹介する資料は、この鷹狩りの間に秀吉が出した朱印状である。まずは、この資料を手掛かりに、この鷹狩りが何が特別だったのかを見ていこう。秀吉は朱印状の冒頭で、今回の鷹狩りで獲物が二千余り獲れたことを、美濃国内に領地をもつ稲葉重道・太田一吉に報告している。その上で、五千程聚楽に持たせて、京都に帰る予定を伝えている。そこで、稲葉・太田の両者に不足分三千程を調達して、京都に帰る途中にある大津まで持つてくるように命じている。傍線部①は「多くの数が必要」という意味を補って解釈した。ほぼ同内容の朱印状がもう一通、伊勢の神戸城主・水野忠重にも出されている（『秀吉文書集』三八四九号）。秀吉は、鷹狩りの成果として京都へ持って帰る獲物が二千では足りないといっって、その補充のため、獲物を確保し持つてくるよう周辺の領主たちに命じた。つまり、秀吉は持ち帰る獲物の数をより多くしたかったのである。この朱印状からは、秀吉が鷹狩り後京都に帰るにあたり、その帰り方に非常にこだわari、方々に指示を出し準備をする様子が見み取れる。

秀吉は同年十二月十六日に拠点としていた京都に帰るが、そのことを事前に広く宣伝しており、当日は多くの人が見物に集まっていた。見物人たちがその様子を日記などに書き留めている（『三藐院記』等）。これらの記録には、大津で準備をして京都に入ってくる豪華絢爛な大行列の様子や、公家や天皇までもが見物していたことなどが書かれている。獲物の多さに言及した記録が多く、秀吉が命じた獲物を補充する演出が功を奏したといえよう。

このとつてもない数の獲物は、天皇にも献上され、見物人のみならず周辺地域の人にも広くふるまわれたため、特に印象深く人々の記憶に残ったのだろう。秀吉はこの鷹狩りからの帰り道を一大イベントに仕立て上げ、多くの人を驚かせました。この鷹狩りは当時大きな話題となり、秀吉の死後にも伝記等で、「大鷹野」と称され秀吉の事績の一つとして後世に語り継がれるようになった。この鷹狩りにおいて特別だったのは、京都への帰り方であった。そして、その帰り方を企画し演出したのは、秀吉自身であったことがこの資料より読み取れる。「大鷹野」は細部に渡って、秀吉の構想のもと執り行われた、肝入りの一大イベントであった。

「大鷹野」を行った理由

なぜ、秀吉はここまで、帰り方にこだわったのか。そのヒントとなるのが、この鷹狩りで秀吉が向かった目的地と時期である。

鷹狩りが行われた場所は三河の吉良だが、当時の資料では、秀吉が向かった先は「尾張」とするものが多い。例えば、鷹狩りに向かう秀吉を見送った大和郡山城主・豊臣秀保の家臣桑山重晴の書状には、「上様尾州へ御成二付」と記され（『愛知県史』資料編十三・二三〇号）、また公家・近衛信尹が、この秀吉の帰洛の大行列について記した日記には、「関白秀吉公尾州鷹野よりかへりの体」とある（『三藐院記』）。近衛のように京都在住でこの地域の地理に明るくない人の場合、混乱が生じた可能性もある。

しかし、桑山重晴については、尾張出身者のため地理に詳しく、また、鷹狩りに向かう秀吉一行に会っていることが想定され、吉良が目的地ならばそのように書くはずである。よって、秀吉の目的地は、尾張だったと考えられるのだ。この時、なぜ秀吉は尾張に来たのか。この時期は、秀吉が後継者にと構想していた甥・豊臣秀次が東北の一揆を平定し、領国である尾張に帰国するタイミングと合致する。また、奈良の興福寺の僧侶が書いた「多聞院日記」の十一月二十七日条には「中納言殿へ於尾州御家督被渡」とあり、この鷹狩りの間に秀吉から秀次へ家督相続が尾張で行われたと記されている。つまり、秀吉は秀次に家督相続を行うため、秀次が帰国するタイミングに合わせて鷹狩りを企画したのである。十二月十六日に鷹狩りから帰ってきた秀吉とみられ、二十八日には秀次が関白に任命されている。

以上のことから、秀吉が「大鷹野」を主催した理由の一つは、『愛知県史』等でも指摘されている通り、豊臣家の家督相続を尾張で行い、後継者で新しい関白となる秀次の存在を世に知らしめようとしたことがあげられる。多くの人々に知ってもらうために、秀吉は京都への帰洛パレードにこだわり、より豪華に演出し京都中の人に見物させたのである。傍線部②に、「鷹狩りの成果を聚楽第に持たせよとある。この通り、帰洛の大行列の終着地は聚楽第であった。当時秀吉は聚楽第を拠点にしていたため、当然のことである。しかし、その直後に聚楽第を秀次に譲っていることと「大鷹野」の目的から考えると、「関白の居所＝聚楽第」まで華々しく帰る、ということが重要だったのではないだろうか。

家督相続の舞台となった尾張

最後に、秀吉が尾張で家督相続を行った理由について、当時の尾張の状況や秀吉の動向から考察を加えてみたい。そもそも、関白という職は、天皇の側に控え、その意向を聞き実務を行う重役で、任命するのも天皇である。よって、朝廷がある京都・畿内で行う方が自然に思われる。しかし、秀吉はわざわざ鷹狩りを企画し、尾張で実行している。

この鷹狩りが行われたのは、秀次が尾張の領主になって、まだ一年程しか経っていない時期である。領主が代わり最初の一年という重要な時だが、秀次は東北に出陣し、尾張を不在にすることが多かった。そこで、秀吉はあえて秀次の領国である尾張で家督相続を行い、領主である秀次の存在を改めて周知し、領国との関係を強めようとしたのではないだろうか。秀吉はその後、秀次が関白になってからも尾張の領主としての立場を解かなかった。一時的ではなく継続的に尾張を掌握していくために、このタイミングで領国内に豊臣氏の領地であることを再認識させ、支配を安定化させることを狙ったのではないだろうか。天正十九年「大鷹野」の前後の尾張の状況と秀吉・秀次の動向を合わせて考えると、豊臣氏による安定した尾張支配を維持しようとする秀吉の姿が浮かび上がるのだ。

〈参考文献〉

- 『豊臣秀吉文書集 五』名古屋博物館、二〇一九
- 『愛知県史 資料編十三 織豊二愛知県史編さん委員会 二〇一一』
- 『愛知県史 通史編三 中世二織豊愛知県史編さん委員会 二〇一八』